

フレンズクラブ活動報告

一、活動の目的・形態

甲南大学人間科学研究所では心理臨床カウンセリングルームとの共催で思春期発達支援事業（愛称・フレンズクラブ）を行っている。この事業は、発達障害のある子どもたちが、同年代の仲間関係を経験すること、その保護者が悩みの共有を通してエンパワーされることを目的としている。スタッフはすべて大学院生であり、スタッフが発達障害児との関わりを実習する場でもある。

本事業の対象は、小学校五年生から中学校三年生までの発達障害のある子どもとその保護者としている。診断、判定は参加条件としておらず、発達障害と同様の状態で困っている子どもも受け入れている。参加者は六組を上限とし、スタッフの人数によって受け入れ可能人数を設定する。期をまたいでの継続参加の制限はしていないので、長い場合五年間参加し続けた親子もいる。

フレンズクラブは大学の前・後期で一期ずつ開催している。一期は十回のグループ活動に、フォローアップの個別面接一回

で構成されている。他に初参加時にはインテーク（受理）面接を行っている。すべての活動が親子で一回五〇〇円である。

活動は親子分離でそれぞれがグループ活動を行うという形態をとっている。子どもグループでは、子ども一人一人にサポーターと呼ばれるスタッフが付き添い、リーダー主導のもと、仲間と協力して遊ぶ経験を積んでいる。保護者グループにはスタッフが一名加わり、参加者が子どもに前向きに関わろうという意欲が持てるよう配慮しつつファシリテートしている。

二、二〇一一年度の活動

① 第一三期 二〇一一年五月二日（水）～二〇一一年七月二〇日（水）

継続参加二組、新規参加四組で開催した。新規参加者の内一組は前年度からの待機者である。スタッフは大学院博士課程二名、修士課程二年六名、一年五名の計十三名だった。

例年通り、前期は昨年度からのスタッフが新スタッフを指導しながら活動した。スタッフ、参加者の人数が程よく、子どもに良い形で対人関係の経験を提供できたのではないだろうか。指導を受け、自分たちだけで運営し、後輩を指導する、というスタッフのサイクルを経験した修士二年の院生はこの期で引退した。

② 第一四期 二〇一一年一〇月二二日(水)～二〇一一年一二月二一日(水)

継続参加四組で開催した。スタッフが六名となり、受け入れ人数に限りがあるため、新規の参加者募集は行わなかった。

子どもグループは修士一年の院生が中心となり、博士課程の院生が補佐しつつ運営した。参加している子どもたちもグループに慣れてきており、スタッフの準備を手伝うなど、自分が主体的に関わる場という認識も生じてきたようである。

③ 研修

毎年外部から専門家においていただき、研修会を開催している。今年度は奈良教育大学の根来秀樹先生をお招きし「精神医学・脳科学からみた発達障害」と題して講演いただいた。

三、まとめ

今年度も子どもグループでは、双六、新聞ホッケー、かるた、ふれあい囲碁など、子どもたちが体と心を総合して使う遊びを考え実施してきた。子どもは体と心が連動しており、体を動かすことで、「友達に声をかけたい」という欲求を自然に表出できるようにする。そういった場面にサポーターが機敏に対応することで、子どもたちの発達に添った仲間体験が可能となつて

いるように見受けられる。

不登校で同年代の仲間との触れ合いが少ない子どもが、フレインズクラブで知り合った子どもと趣味の話をするために、保護者に「〇〇君、どんなゲームしているか聞いておいて」と頼んだと聞いた。直接の関わりが可能となるまでには時間がかかるだろうが、こういった子どものちょっとした変化を、対人関係の展開につながる萌芽と受け止め、大切に育てていきたい。

保護者グループでは、第十三期は自由におしゃべりする中で、子どもの言動への対応をアドヴァイスし合った。参加者は子育てのストレスを吐き出し、共感し合うことで、直接の解決には至らなくても、子どもと向き合うエネルギーを得ているようだった。

第一四期は隔週のペースでペアレントトレーニングを導入した。保護者は「子どもの良い行動に注目することで、子どもは何がよい行動なのかがわかる」と、頭では理解していても、日頃はずいぶん、よくない行動に注目して指導、指示してしまいがちである。段階を追って学び、家庭で実践することを通して、頭の理解と行動が一致する。そして参加者は「ああ、また怒ってしまった」という後悔の多い子育てから脱し、子どもができるようになったことを共に喜び、子どもの自信につながる楽しい子育てに自ら変化していく力を持つていると実感していかれ

四、今後の展望

フレンズクラブは第一三期で丸六年が経過した。六年の実践を通じて、フレンズクラブは思春期の子どもにとって公園デビューの体験であるとの思いを強くしている。

幼児期の公園デビューでは、子どもは特定の養育者に付き添われて、少しずつ仲間の輪に入り、不安や恐怖が生じれば養育者のもとに逃げ込み、慰められ、適切な関わり方を教えられ、また、仲間の中に入って行く。発達障害のある子どもは、思春期になってようやく、養育者に甘えながら仲間との遊びを体験することへの内的準備が整うが、その一方で、親への反抗、自分は一前だという意識は年齢相応に発達してくる。そのため、彼らが親に付き添われて公園デビューをすることは難しい。

親、特に母親は、幼児期に甘えを見せなかった子どもが思春期になって形を変えて甘えを表現したり、あるいは、その時期になってようやく幼い形で甘えたりする状態に適切に対応できず、時に過剰に甘やかしたり、時に突き放し過ぎたりしがちである。

フレンズクラブでは、親の代わりとなるほどよい見守り手としてサポーターが機能することで、子どもたちが無理のない公園デビュー体験をしているように思われる。サポーターは子ども

もにとつては、見守り、教え、時には大人ぶりたい時の対等の相手であり、保護者にとつては自分の代わりに子どもを見守ってくれる人である。サポーターを媒介として親子が、象徴的公園デビューをしているというフレンズクラブの場の意味が実践の中で明確になってきたと感じている。

来年度は、このような活動全体の構造をスタッフ全員が理解し、より合目的に活動していきたいと考えている。

(南野 美穂)